

歌川広重作『絵本江戸土産』における風景描写の特徴

—『江戸名所図会』との比較を通して—

阿部美香

I. はじめに

- (1) 研究目的
- (2) 研究対象と方法
- (3) 比較対象史料の位置付け

II. 『絵本江戸土産』に描かれた場所

III. 『絵本江戸土産』と『江戸名所図会』との絵の比較

- (1) 絵の構図の種類
- (2) 構図からみた『絵本江戸土産』の絵の特徴

IV. 『絵本江戸土産』と『江戸名所図会』との文章比較

- (1) 風景評価の着目点
- (2) 『絵本江戸土産』に描かれた場所の風景評価の着目点

V. おわりに

I. はじめに

(1) 研究目的

本稿の目的は江戸時代後期に活躍した浮世絵師歌川広重（1797～1858）が、自身の作品の中で風景¹⁾をいかに描出したか、またどのような場所を名所として捉えたのかということ、同時代の名所案内記との比較から明らかにすることである。

名所案内記、またその一種である名所図会に関しては、①描かれた地域の都市構造や、作者の地域・都市認識を論じたもの²⁾、②名

所図会から同時代人の生活実態を検討したもの³⁾、③名所案内記の類型化をしたもの⁴⁾、④描出された名所観に迫ったもの⁵⁾、⑤描かれた図像の特徴について論じたもの⁶⁾など、多岐にわたって研究蓄積がある⁷⁾。

名所図会に表された風景はその作成者の技術をもって、ある意図のもと描かれたものであり、当時のありのままの風景を描写したものとはいえない。しかしそれゆえ特定の社会的・歴史的コンテクストの中でいかに風景が描出されたのかということは、興味深い事柄である⁸⁾。

一方1830年代以降風景画の分野が確立していった浮世絵⁹⁾においても、多様に存在する画派¹⁰⁾により表現技法が異なり、「やつし絵」や「見立絵」の存在に代表されるように、ある意図によって作画されるという事実も指摘できる¹¹⁾。加えて浮世絵が「庶民大衆の広範な需要を前提とした美術」¹²⁾であり、「浮世絵師は、特定の注文主から依頼を受けてはじめて制作にかかるのではなく、あらかじめ広範な支持を期待して作画」¹³⁾したということは注視するべきである。すなわち浮世絵がある社会の中に生きた人々の嗜好性と深く関わりながら存在していたという点を踏まえると、浮世絵風景画の中に風景がいかに描出されたかということは重要な研究テーマである。しかし、それに関して現在まで歴史地理学において、十分な研究蓄積があるとは言

キーワード：歌川広重、風景、江戸、絵本、名所図会

えない。名所図会における地誌的配列の提示と鳥瞰図的な図様の関係性を明示し、その特徴を論じた矢守は、一方で「元文・寛保にかけて興ってくる浮世絵は、地誌書における鳥瞰図の発達史にとっても、おおいに関心のもたれるところである」¹⁴⁾とし、「自らの実況の写生を求められたであろう名所本の挿絵も、風景版画の発達に寄与したのではあるまいか」¹⁵⁾と述べ、風景表現の媒体としての浮世絵と名所案内記との関わりを示唆しているが、具体的な分析までは行っていない。

浮世絵に関する研究は、主に美術史の中で数多く積み重ねられてきた。代表的な研究として、浮世絵の成立や歴史に関するもの¹⁶⁾、画派やその特徴に関するもの¹⁷⁾、風景版画の成立に関するもの¹⁸⁾などが挙げられる。本稿で、浮世絵風景画の絵師の代表として取り上げる歌川広重に関しては、人物史、作品数や名称および種類、伝記、提携版元等の整理をしたもの¹⁹⁾、主に作品論として技術的かつ美的評価を与え、「詩趣豊か」とその描写内容について論ずるもの²⁰⁾、そして広重の作品における種本の存在、技術的な構図の特徴、銅版画や画壇からの影響関係を整理した上で、名所図会との関わりをも述べるもの²¹⁾など多くの研究蓄積がある²²⁾。しかし、広重の浮世絵風景画と名所図会との関わりは、主に浮世絵と名所図会の挿絵との比較から論じられ、その相違は描写視点の位置と図様の近似性を概観する等に留まっており、広重が当時の社会の中でいかなる意図をもち「名所」として風景を描出したのか、ということに関する論考は十分とはいえない。

以上のような状況をふまえて本稿は、広重の浮世絵風景画に込められた作画意図を解明するための一段階として、浮世絵作品と密接な関わりを持つ広重による絵本を分析対象とし、それと関連する名所図会との比較から、その風景描写の特徴を明らかにすることを目的とする。

(2) 研究対象と方法

本稿で分析対象とする作品は、江戸の名所を描く名手とされた歌川広重²³⁾による浮世絵「名所江戸百景」との関連が指摘される²⁴⁾広重作の絵本『絵本江戸土産』と、同時代の名所図会『江戸名所図会』である。

名所図会において各名所を説明する文章は、挿絵と両輪をなす重要な構成要素である。しかしこれまで浮世絵風景画と名所図会が比較される際、名所図会の文章をも考慮した分析が十分に行われているとはいえない。浅野は「名所江戸百景」の各所蔵本に関して摺りの状態等を比較し、その魅力を、江戸の情趣の表現と、広々とした空間描写であるとした上で、「名所江戸百景」と関連する広重の作品として『絵本江戸土産』を挙げ、その重なりを図様の面からまとめている。しかしその比較に際しても、『絵本江戸土産』の文章に関しては触れられてはいない²⁵⁾。また筆者は、「名所江戸百景」に描かれた風景の考察において、『絵本江戸土産』の文章を一部用いてはいるが、『絵本江戸土産』の風景描写に関しては文章、絵ともに網羅的かつ確実な言及は行っていない²⁶⁾。そこで本稿では、対象の絵本と名所図会との比較にあたり、絵と挿絵の比較のみならず、文章をも分析対象として、それらに表現された風景の特徴について考察したい。

「名所江戸百景」（以下「百景」）は「東海道五拾三次」を出世作とし、浮世絵風景画における新分野を開いて活躍した広重²⁷⁾が、1856（安政3）年から晩年となった1858（安政5）年まで、江戸の風景を118枚にわたり描き出した大作である。「百景」は全て豎絵の構図であり、「一つの物体の一部分を極端に誇張して大きく近景に据え、その物体越しに大自然の風物を小さくパノラマ風に配して遠近感を強調する」描かれ方が作品の特徴の一つとなっている²⁸⁾。

その「百景」の絵とおよそ7割の描写地が

重なり、「百景」作画の下絵となったことが指摘される作品が『絵本江戸土産』（以下『土産』）である。『土産』は1850（嘉永3）年から1867（慶応3）年に出版され、初編から七編までを初代広重が、八編から十編までを二代広重が手がけている絵本である。ここには広重によって描かれた江戸の名所絵とともに、その場所を説明する文章が記されている²⁹⁾。このうち本研究では、初代広重による初編から七編までを検討対象とする。

そして『江戸名所図会』は、齋藤幸雄、幸孝、幸成の親子三代が編纂し、長谷川雪旦（1778～1842）が挿絵を手がけ、1834（天保5）年から1836（同7）年にかけて七巻二十冊が刊行されたものである。これらにも名所を説明する文章が記されおり、次節に示す理由から、『土産』との比較に適するものであると考えられる³⁰⁾。

よって本稿では、『土産』に描かれた場所を概観した後、まず『土産』に描かれた場所の絵と『図会』の挿絵とを比較し、その構図からみた『土産』の絵の特徴を検討する。次に描かれた場所に関して記された両者の文章を比較することで、『土産』の風景記述の特徴を考察する。

なお、本研究では、『土産』の各頁に描かれた風景一つ一つを分析する。そのため、同一の場所であっても、切り取り方の異なる複数の風景が存在する場合もある。『土産』で取り上げられた場所と風景の関係については、IIで後述する。

(3) 比較対象史料の位置付け

鈴木は江戸の名所案内記の類型を、随筆や雑記、仮名草子、地誌、地図および絵図、絵本や錦絵、その他という6種に分類し、その歴史的系譜を5段階に分けて説明している³¹⁾。表1は同氏の考察をもとに、その類型・段階と、江戸の名所案内記をまとめたものである。なお本稿では同氏の定義に従い、『絵本

表1 江戸の名所案内記とその段階

成立年代	書名	段階
慶長19(1614)	慶長見聞集	①見聞録に近いもの
元和7(1621)	竹斎	
寛永20(1643)	色音論	
寛文2(1662)	江戸名所記	②地誌の萌芽
延宝5(1677)	江戸雀	
延宝8(1680)	元の木阿弥	
天和3(1683)	紫の一本	
貞享4(1687)	古郷帰の江戸咄	
元禄3(1690)	江戸鹿子	③実用的な名所案内
享保13(1728)	江戸内めぐり	
享保17(1732)	江戸砂子	
享保18(1733)	江府名勝志	
享保20(1735)	続江戸砂子	
明和9(1772)	再校増訂江戸砂子	
文政元(1818)	異本江戸披砂	
文政2(1819)	砂子残月	
文政10(1827)	江戸名所花暦	④江戸名所案内記の集大成
文政11(1828)	新編武蔵風土記稿	
文政12(1829)	御府内備考	
天保5(1834)	江戸名所図会	⑤名所案内の視覚化
弘化3(1846)	絵本江戸めぐり	
嘉永3(1850)	絵本江戸土産	
安政3(1856)	名所江戸百景	
安政5(1858)	狂歌江戸名所図会	

注) 鈴木(2001)をもとに作成

江戸土産』および『江戸名所図会』の両方を名所案内記として扱う。

まず、①は、地方から江戸へ来た人々が、江戸見物の様を書き留めた見聞録に近いものである。この段階の特徴としては、物語性・文学性が強く、実際に名所へ赴こうとしても、その名所の所在地が判然としない、ということが挙げられる。

②は、明暦3(1657)年の大火後、新しい江戸の町の紹介をしたものであり、実用的かつ現実的に、江戸の名所のある地域構成に従って記述する地誌へと移行する段階であ

る。名所や旧跡の単なる羅列ではなく、ある程度の地域的なまとまりを持たせようとするもので、その構成を本格的に取り入れた最初の地誌として『江戸名所記』が挙げられる。

③は、一層実用的な名所案内を目的に編纂された段階である。『江戸鹿子』のように、名所として取り上げた対象を、山や岡、神社、寺院、通り、名匠、問屋など種類別に分けてまとめたものと、②の『江戸名所記』および『江戸雀』に見られたような、地域別の名所紹介を行っているものがある。後者にあたる『江戸砂子』では、江戸市中を6つの地域に分け、その地域ごとに、寺社・坂・橋などの小見出しを付け、それぞれにおける名所を網羅的に記述している。

④は、それまでの江戸に関する名所案内記の集大成が生み出される段階である。その中で、名所を地域別に編纂する形態を取り、さらに対象種類の網羅的な掲載を実現したものとして『江戸名所図会』がある。長谷川雪旦の挿絵により名所旧跡の配置やその周辺概況を示し、名所の由来や事実等の記述によって、実用性からさらに進んだ読者の名所理解を促した。

そのような『江戸名所図会』は、⑤絵本や錦絵によって名所を視覚的に捉える段階にも影響を及ぼすこととなった。広重による絵本や浮世絵もこの段階に属する。

以上のような鈴木の研究から、『江戸名所図会』は、江戸に関する名所案内記の中で最も総合性の高い地誌といえることができる。総合性に秀でるといえることは、様々な面における他史料との比較の可能性も高いということであり、ここに、『図会』を比較対象とする意義がある。『土産』と『図会』において、同じ場所を異なる作者・絵師がいかにか描出しているかを比較することにより、広重の描写の特徴を浮き彫りにできるものと考えられる。

II. 『絵本江戸土産』に描かれた場所

表2は『土産』における各頁の題目を、初編から七編の順に並べ、便宜的に番号を記したものである。見開き(2頁分)ごとに表された一つの風景に対して一つの番号を付すことを基本とするが、序言の次および奥付の前の1頁分でも、風景とそれへの説明のあるものは一覧に含めた³²⁾。

表中、まず番号が白抜きとなっているものは、『土産』に絵のみが描かれ、説明文のないものである。つづいて題目に関して網掛のものは、『土産』にはその場所の記載はあるが、『図会』の中には、同じ場所の記載そのものが独立してないものである。題目が斜体太字のものは、『土産』に描かれた風景の展開する場所自体は『図会』中にも記載されているが、『土産』の取り上げた風景は『図会』にはみられないものである。

以下に、『土産』のみに見られるそれらの場所および風景に関して、『図会』での取り上げられ方との相違を示しながら、いくつかの観点に分けて概観しておきたい。

まず表に網掛で示した、『土産』で取り上げられた場所そのものの記載が『図会』中に独立してない場合であり、この場合には二種類ある。一つは『図会』中に全くその場所に関する文言や絵が登場しない場合であり、もう一つは別の場所の挿絵中に周辺の風景の一部として、小さな文字で場所名が記されているか、別の場所の説明内に、その位置を示す目的で場所名の記載がある場合である。

前者の例としては、167「大井の原」が挙げられ、他には123, 133, 147, 153などが該当する。後者の例として155「小梅の堤」を挙げると、「大川橋」の挿絵において、中央に隅田川、画面手前に大川橋、遠景に筑波山、そして左右に同川兩岸の様子が描かれる中に、東岸の村の一部として「小梅」の文字が記され、堤と思われるものも同時に描かれ

表2 『絵本江戸土産』の題目

1	八ツ見橋の景	36	築地御坊	71	角筈熊野十二社権現	106	筋違八ッ小路	141	馬喰町初音馬場
2	其二	37	其の二	72	其二 大滝	107	昌平橋聖堂	142	両国柳橋料理屋會席
3	両国橋	38	芝浦	73	堀之内妙法寺	108	御茶の水	143	其二 向両国茶屋元柳橋濱町
4	御厩河岸 駒形堂 金竜山遠望	39	其の二	74	井の頭の池辯財天社	109	水道橋	144	新川 新堀靈岸島
5	宮戸川 吾妻橋	40	赤羽根水天宮	75	小金井堤 兩岸満花	110	神田明神の社	145	鐘の渡
6	隅田川 真乳山の夕景	41	高輪の光景	76	其二 小金井橋花見	111	本郷通	146	江戸橋小網町
7	墨田堤 花盛	42	同所 二十六夜待	77	多摩川	112	湯島天神雪中の図	147	京橋竹川岸
8	水神の森 真崎の社	43	同所 月の岬	78	四ツ谷大木戸内藤新宿	113	同所 坂上眺望	148	奥山花屋舗 百草の園
9	木母寺料理屋 御前裁畑内川	44	御殿山の花盛	79	井の頭上水	114	上野黒門及三橋の図	149	浅草金龍山境内樓
10	花屋敷 秋の花園	45	其の二	80	高田馬場	115	其二山王山眺望	150	同所 奥山花屋舗
11	柳島 妙見の社	46	品川海晏寺の紅楓	81	山吹の里姿見橋	116	其三 清水堂花見	151	首尾の松大川端椎の木屋舗
12	押上 萩寺	47	品川沖汐干狩	82	雑司ヶ谷鬼子母神法明寺	117	其四 山門摺鉢山花見	152	請地秋葉棧現境内
13	吾嬬の森	48	南品川鮫洲大森	83	大塚護国寺音羽町	118	其五	153	堀切の里花菖蒲
14	亀戸梅屋敷	49	蒲田の梅園	84	巢鴨庚申塚	119	同所 池之端料理屋	154	小村井梅園
15	亀戸天神の社	50	大森の土産	85	板橋宿	120	其二 不忍之池全國中島辯天の社	155	小梅の堤
16	木下川の風景	51	六郷川舟渡	86	川口の波善光寺	121	谷中 天王寺	156	四ッ木通引舟道
17	逆井の渡	52	大師河原平間寺	87	王子稲荷社	122	根津権現社地紅楓	157	新宿の渡し場
18	国府の臺眺望	53	羽田辯財天社	88	王子藩の川	123	染井植木屋	158	千駄木団子坂花屋舗
19	真間の繼橋手小名の社	54	新田明神社	89	其二 同所岩屋の辯天	124	根岸の里	159	其二 紫泉亭より東南眺望
20	利根川ばらばら松	55	千束池袈裟掛松	90	十條の里女滝男滝	125	今戸瓦竈	160	関口上水端芭蕉菴椿山
21	中川	56	池上本門寺	91	不動の滝	126	橋場の渡し	161	麻布古川相模殿橋廣尾之原
22	小奈木川五本松	57	八景坂鑑懸松	92	同所湯滝	127	千住川大橋	162	目黒元不二下道
23	五百羅漢さざい堂	58	目黒不動尊	93	音無川の堰世俗大滝と唱	128	浅草西の町	163	同所 新富士山上眺望
24	富が岡の牡丹	59	千代ヶ崎風景	94	王子料理屋河辺の宴席	129	日本堤山谷	164	同其三 爺々茶屋
25	富ヶ岡八幡宮	60	富士見茶屋	95	飛鳥山花見	130	衣紋坂見婦柳	165	目黒千代ヶ池
26	其の二 同所山開	61	麻布一本松	96	其二	131	新吉原仲の町植櫻	166	其三 同太鼓橋夕日の岡
27	深川三十三間堂	62	葵ヶ岡溜池	97	道灌山	132	其二 娼家	167	大井の原
28	洲崎辯天	63	江戸見坂	98	日暮里諏訪の臺	133	金龍山奥山浦田圃	168	再出 御殿山當時のさま
29	深川木場	64	愛宕権現	99	其二 同所 寺院庭中 雪の景	134	猿若町	169	品川 洲崎辯天の祠芝浦眺望
30	新大橋萬年橋正木の社	65	虎の門金比羅社葵坂	100	其三 同所つづき	135	金龍山觀音堂 奥山	170	芝増上寺
31	中洲三ツ俣	66	霞ヶ関	101	谷中 螢沢	136	其二 同所辯天山	171	同所芙蓉洲辯天社
32	永代橋	67	外櫻田辯慶堀杭町	102	日本橋	137	其三 雷神門	172	芝神明の社
33	佃白魚網夜景	68	赤坂桐畑永田馬場山王社	103	駿河町	138	其四 雷神門前 廣小路並木茶屋		
34	同所狼煙打上の図	69	青山新日暮里	104	鎌倉河岸	139	浅草御門跡		
35	鉄炮洲湊荷荷境内の不二	70	青山竜岩寺庭中	105	護持院原	140	柳原 河岸通		

番号：『土産』に文章のないもの（絵のみ）

文字：『図会』に場所の独立した記載自体がないもの

文字：『図会』に場所の記載はあるが『土産』で取り上げられた風景の描出はないもの

ている。東岸には他に「請地」などの村名や「弘福寺」などの寺名が記されており、これらと同様に、「小梅」の村名と概況があくまで挿絵の主題である大川橋周辺の風景の一部として描かれていることが分かる。このような場合には他に130, 143, 151, 156が該当する³³⁾。

次に題目を斜体太字で示した、『図会』に

その場所自体の記載はあるが、『土産』に取り上げられた風景は描出されていない場合である。二種に分けてこの場合を見てみたい。

一つ目は、『図会』の中ではいくつかの項目にわたり、それぞれ文章や挿絵をもって記されているものを、『土産』ではそれらを一度に見渡して、一つの画面に収めながら取り上げている場合である。4「御厩河岸 駒形

堂 金龍山遠望」を例にとると、『図会』では「駒形堂」と「金龍山浅草寺」が文章と挿絵をもって、「御厩河岸渡」が挿絵により、それぞれ個々に表されている。しかし『土産』ではこれら三者を同時に画面に収め、全体としての風景について取り上げ、説明をしている。このような場合は他に、67, 144が該当する。

二つ目は、『土産』がその場所にある一つの事柄や事物を特筆しているが、『図会』で『土産』と同じ題材をその場所の風景から選び取り描出してはいない場合である。この場合の例を二つ挙げてみたい。まず、24「富が岡の牡丹」である。『図会』では文章と挿絵の両方をもって「富岡八幡宮」の説明がなされているが、その中で『土産』のように、とりわけ庭中の牡丹に注目して記すということは認められない。もう一つは34「同所狼煙打上の図」である。「同所」とは佃島のことであり、『図会』の中で「佃島」もまた、文章と挿絵の両面から説明されている場所である。『土産』においては、毎年夏の末から秋にかけて行われる狼煙の稽古の様をとりたてて描いている。しかし『図会』の中でそのような記載は見られない。これに該当するものは他に16, 68, 149, 150などである。

以上、『図会』と比較した際、特に『土産』のみに見られる場所と風景について概観した。これらは広重の風景評価の特徴がよく示されているものである。次章以降、これらを含めた『土産』に描かれた場所および風景に関して、内容の特徴と描写理由の考察を進める。

Ⅲ. 『絵本江戸土産』と『江戸名所図会』との絵の比較

(1) 絵の構図の類型

本章では『土産』の絵と『図会』の挿絵とを比較し、『土産』における描写の特徴を主として構図の面から検討する。その前に、ま

ず対象作品を描いた絵師とその画派について若干の整理をしておく。

『土産』を描いた歌川広重の属した歌川派の祖、歌川豊春は浮絵の発展、西洋画法の修得に努め、遠近表現の熟達に勤しんだ。広重の師、歌川豊広も豊春の門人であるため、豊春の技術は門人らへと伝えられ、広重による大成がなされた。よって広重の描く風景画は西洋画にならう透視遠近法の技法も多用されている³⁴⁾。

一方、長谷川雪旦は長谷川等伯(1539～1610)の末流を称している。等伯は桃山画壇を代表する絵師であるから、雪旦は伝統的な大和絵の絵師ということになる。加えて雪旦父子が狩野派に属し、風景描写を鍛錬したという研究³⁵⁾もあり、風景描写の技術の高さも指摘し得る。

次に『土産』の絵と『図会』の挿絵を比較するにあたって、以下のような5つの類型を設けて検討を行う。

まず、空間に対する視点の位置として、水平、俯瞰、仰観があるが³⁶⁾、矢守による、特に寺社に関して「名所図会を特色づけているのは俯瞰図ないし鳥瞰図が多いという点である」という指摘³⁷⁾から、俯瞰して①神社・仏閣の全体を描いているもの(図1)、および②神社・仏閣の一部を描いているもの(図2)、さらに描写対象物が神社や仏閣以外のものに関して、③神社・仏閣以外の対象物をほぼそれのみを描いているもの(図3)という類型を設けた。

さらに、矢守による「名所と名所間の地理的連続が雲形によって断たれている個所が少なくない」という指摘³⁸⁾や、日本における風景画の歴史を鑑みた際に、離れた描写対象地を雲や霞で補填するという技法が存在する³⁹⁾事実から、④雲や霞は描かれず、切れ目なく連続性を持った風景描写のもの(図4)、および⑤描写対象物間に雲や霞が存在しているもの(図5)も類型に加えた⁴⁰⁾。



図1 神社・仏閣の全体を描いているもの
『叢会』「堀之内妙法寺」

注) 京都大学附属図書館蔵本による。



図2 神社・仏閣の一部を描いているもの
『土産』「堀之内妙法寺」

注) 京都大学総合人間学部、人間・環境学研究所図書館蔵本による。

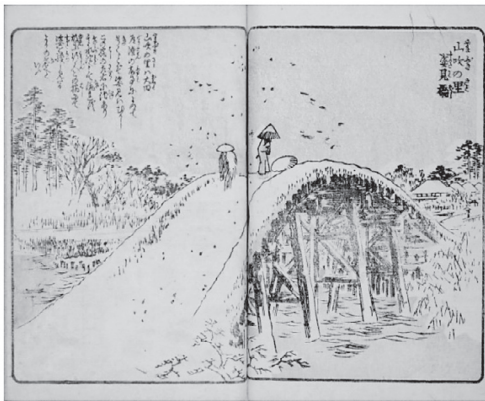


図3 神社・仏閣以外の対象物のみ描いているもの
『土産』「山吹の里姿見橋」

注) 図2に同じ。



図4 連続性を持った風景描写のもの
『土産』「大井の原」

注) 図2に同じ。

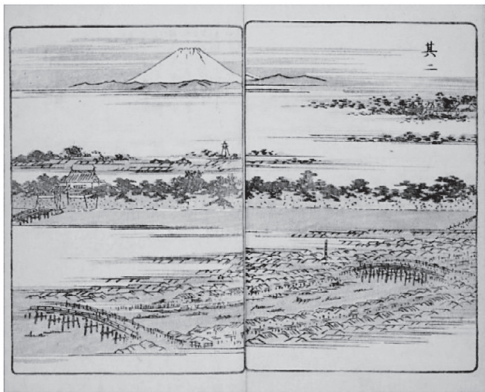


図5 描写対象物間に雲や霞が存在しているもの
『土産』「八ツ見橋の景 其二」

注) 図2に同じ。

(2) 構図からみた『絵本江戸土産』の絵の特徴

上述の類型に従って両者の絵と挿絵を分類した結果が表3である。表3において、『土産』の絵の総数は、題目数と同じ172である。『叢会』に関しては、『土産』に対応する場所が『叢会』内に記載されているものの中で、挿絵のあるものを分析対象としており、その総数は146となる。

表3によれば、神社や仏閣の全体を描く場合は全て俯瞰景で描かれており、その数は『土産』が1に対して『叢会』は48と圧倒的に『叢会』の方が多くなっている。それに対して、ある神社・仏閣の一部のみを大写しで

表3 『土産』の絵と『図会』の挿絵における構図の類型数

構図の類型	『土産』	『図会』
① 神社・仏閣の全体を描写（うち俯瞰景）	1 (1)	48 (48)
② 神社・仏閣の一部を描写（うち俯瞰景）	34 (21)	6 (3)
③ 神社・仏閣以外の対象物それのみを描写（うち俯瞰景）	34 (21)	27 (22)
④ 切れ目の無い連続した風景を描写（うち俯瞰景）	66 (25)	19 (11)
⑤ 雲・霞が対象物間をつなぐ描写（うち俯瞰景）	37 (26)	46 (37)
合計	172 (94)	146 (121)

描いている場合は、総数で見ると『土産』は34に対して『図会』が6であり、こちらは『土産』が多い。神社・仏閣以外の対象をほぼそれのみを題材としている絵に関しては、『土産』と『図会』では事例数に他ほど差がないことが分かる。

一方、絵の主題となる対象のみならず、その周辺の景色も連続した形で描写しているものに関しては、『土産』と『図会』の間でかなり事例数の差が認められる。すなわち『土産』では連続性を有する描かれ方をしているものは『図会』の3倍以上存在している。しかし、画中の複数の描写対象物を非連続的に描き、その隔たりを雲や霞を描くことで補填しているものになると、その多少は逆転し、『土産』で37であるのに対して、『図会』では46となる。

以上からわかる描写の特徴を考えると、まず『図会』に多い類型として、神社や仏閣の全体を俯瞰景で描いているものと、二カ所以上の離れた場所を雲や霞で間を埋めて描いているものが挙げられる。神社・仏閣の全体を俯瞰景で描くという特徴は、時代を遡って洛中洛外図や、土地の人々の空間認識が表れる絵図にも認められることである⁴¹⁾。その事実の背景にある事柄は、矢守によって「名所を地誌的配列に従って図説する名所図会に、鳥瞰的構図の図絵が多く援用されているのは当然」として既に指摘されている⁴²⁾。すなわち俯瞰景で寺社等の配置や平面的構造

を文字とともに示すこの表現は、その神社・仏閣の全体像を説明し案内することに好都合であると考えられる。さらに、『図会』では時に数頁に渡って神社・仏閣等の全体を紙面一杯に表すこともあり、それは、『図会』冒頭の凡例にある、「他邦の人をして東都盛大の繁栄なる事を知らしめ」という、挿絵を描く目的の一つにもかなうものである。また、『図会』では、雲や霞によって描写対象物間の空間的隙間を埋めるという、大和絵から受け継がれる表現法の影響を強く見て取ることができる⁴³⁾。

一方、『土産』で特徴的に多く見られる表現として、ある神社・仏閣の一部分のクローズ・アップや、切れ目のない連続的な描写が挙げられる。これらは、描写対象物間に断絶はほぼなく、連続して風景が展開されることで、現実にその風景を目にした時の様子に近い描かれ方をしていることを意味する。ここから『土産』は、特に神社・仏閣の描写に関して、その地誌的概況を説明し案内する傾向の強い『図会』に比べ、絵を見る者が実際にその場で目にする光景に近い表現がなされているとも言えよう。

IV. 『絵本江戸土産』と『江戸名所図会』との文章比較

(1) 風景評価の着目点

本章では『土産』に記された文章と、『土産』の各題目の場所に対応した『図会』中の

説明文とを比較し、同一の場所に対してどのような説明上の違いがあるのかを検討することで、『土産』の風景描写の特徴を明らかにしたい⁴⁴⁾。

まず、『土産』の各場所における説明文と全く同様の説明文が『図会』の中にみられるか否かを検討した。その結果、絵のみが描かれた三例を除くと、『土産』におけるその場所を説明した169の文章のうち、『図会』内にも全く同様のことが記されているものは全体のおよそ2割、31例に留まるのに対して、文章の一部、又は全体に渡り、『土産』独自の表現が示されているものはおよそ8割、138例に上ることが明らかとなった。これは、『土産』では『図会』にはない視点でその場所の風景について語られているということの意味していると考えられる。なお、ここでは、表2における網掛の題目、すなわち『土産』のみに見られる場所に対する文章も、『土産』独自の表現とみなした。

次に、具体的にその名所をどのように記述しているかを比較してみたい。その際、ある場所に関する説明の中で、その場所の故事来歴や伝来、また位置を示す記述以外の風景表現に注目をした。古く和歌に詠まれた「名所(ナドコロ)」に起源を持つ「名所」は、本来過去から伝えられてきた由緒や由来に大きく依拠するものであり、その古跡の捉え方そのものが議論の対象となりうるものである⁴⁵⁾。故事来歴が心象風景という形で存在し、その場所の風景に対する見方や評価、感覚などへ影響を与える可能性は十分に考えられる。しかし本稿では、そのようなその場所の由緒性

に付随する価値ではなく、当時を生きた広重、また齋藤父子、長谷川雪旦が、その時にある場所で体験したものや見ることでできた風景に対して、どのような価値を見出し、評価をしたか、ということに焦点を当てる。そのため、由緒や位置を示している文章以外の、その場所の風景に関する表現を分析対象とする。

一例を示せば次のようになる。『土産』「橋場の渡し」の説明文は「橋場町の末にありこれそのむかし石浜とよびて古き戦場の趾なりといふ 隅田川の風光は ここにまさる所なし」である。この中で、冒頭の「橋場町の末にあり」は位置を表す記述、「これそのむかし石浜とよびて古き戦場の趾なりといふ」は由緒や由来を示す表現とすることができる。よってここでは、それら以外の表現である「隅田川の風光は ここにまさる所なし」をこの場所における風景を表す表現として分析対象とする。

このような分析を進めていくにあたり、まず各名所の説明内にその名所の由緒や由来、また位置に関する記述がどの程度存在するかを検討した。その結果が表4である。

表4に関して、『土産』の合計数は題目と一致して172であるが、『図会』は『土産』に対応する場所の記載があるもののみを取り上げており、その合計数は、表2の網掛で示した『図会』の中に『土産』に取り上げられた「場所の独立した記載自体がない」場合を除いた151である。また、「由緒・位置の記述なし」には、『土産』、『図会』ともに、絵や挿絵のみの場合も含まれる。

表4 『土産』と『図会』における由緒・位置記述の有無

	由緒のみ 記述あり	位置のみ 記述あり	由緒・位置と もに記述あり	由緒・位置 の記述なし	合計
『土産』	49	36	43	44	172
『図会』	14	4	101	32	151

表4から、『土産』では由緒のみ、位置の記述のみ、およびその両方が記されている場合の数に大きな差はないが、『図会』ではその名所の由緒と位置を両方とも記述する場合が圧倒的に多いことがわかる。ここに、『図会』におけるナドコロを発想のもとにした「名所へ案内する」という性格の一端をみることができる。

次に、その名所の由緒や位置以外の風景に関する説明に対し、何に注目してその場所の風景を評価しているかを検討した。ここでも『図会』に関しては、『土産』に対応する場所の記載があるもののみを取り上げた。

由緒や位置表現以外の風景に関する何らかの記述がある題目の総数は、『土産』で142、『図会』で89である。そして、それら由緒や位置表現以外の風景に関する記述から風景評価の着目点を見出し、『土産』における着目点ごとの文章例を示したものが表5である。

表5により、各着目点を説明すると次のよ

うになる。まず「眺望」⁴⁶⁾に関して、「利根川ばらばら松」を例にとると、川風にさらされ、自然と屈曲した松の見えるこの場所の眺望はやはり良いものである、として、その眺望を愛でていることがわかる。このように「眺望」や「見はらし」などの言葉によって、また「渺々」などの修飾語をとめないながら、海や原など開けた空間を見渡しその様子を愛でている場合、その風景の「眺望」を評価しているものとして分類をした⁴⁷⁾。

次に「眺望」以外の「景色の良さ」に着目し評価している場合に関して、「多摩川」を例にとると、ここでは、多摩川は東国で第一の勝れて良い景色であって、その流れはひとすじではない、としている。このように、「眺望」以外の視点からその風景の景色の良さに着目している場合を「景色」に分類した⁴⁸⁾。

次に「特徴的な事物」であるが、「宮戸川吾妻橋」を例にとると、この吾妻橋が、江戸の四大橋の一つであって、その情景が良い、

表5 『土産』における風景評価の着目点と文章例

着目点	『土産』における文章例(『土産』題目名)
眺望	「川風に揉まれ屈曲して松ハ自然の振をなし眺望尤勝れたり」(利根川ばらばら松)
景色	「東国第一の勝景にしてその流れ一条にあらず」(多摩川)
特徴的な事物	「東都四大橋の其一にして風景よし」(宮戸川 吾妻橋)
山水美	「この辺すべて山水の景地なりといへども常に見なれて人は是を称することなきぞ遺憾なるべき」(赤坂切畑永田馬場山王社)
遊観	「近頃種々の花を植て四時の遊観となせり」(千駄木団子坂花屋舗)
繁昌	「境内名高き料理やありて四時賑ハふ」(木母寺料理屋 御前裁畑内川)
名物	「多く籠衆を建て海苔をとりこの辺の名産とすこの海苔諸国に冠たるものなり」(南品川鮫洲大森)
風流	「この辺閑雅の風景あり詩歌の人々常に称す」(水神の森 真崎の社)
靈験	「靈験ことに新にして四時参詣夥し」(堀之内妙法寺)
耕地・広野	「させる風景の地ならずといへども水に望み曠野に望みて只管閑雅の地なる」(関口上水端芭蕉菴椿山)
季節・天候・時刻	「境内楓樹多くして、季秋より初冬にいたり霜葉宛も紅にして錦が岳とも称すべき」(根津権現社地 紅楓) 「山に副海に近く四時の瞻望あるが中にわきて雪中の景色この地に倍るハなし」(赤羽根水天宮) 「この山上に鐘楼ありて、昼夜二六の時を報る 明六ツをもて仁王門をひらき晩六ツをもてこれを閉る この鐘をもて当山開閉の規とせり」(金竜山観音堂 その二 弁天山)

と愛でている。このように、特にその場所に特徴的な事物を取り上げてその様子を評価している場合、この分類とした。

つづいて「山水美」を賞美する場合である。「赤坂切畑永田馬場山王社」を例にとると、この辺りの風景はひとしく山水美に秀でているにもかかわらず、人はこの景色に見なれてしまい、その美しさを自覚しないことは遺憾である、と述べられている。このように、その風景の有する山水の美しさをとりたてて賞美している場合に、この分類とした。

次に「遊観に値する」という点に着目している場合である。例として「千駄木団子坂花屋舗」を挙げる。この場所では近來様々の草花を植えており、四季に渡って遊観するに良い所である、と記されている。このように、その場所を歩きながら見物することへ価値を見出している場合、この分類とした。

つづいて「繁昌している」点を評価している場合である。「木母寺料理屋 御前栽畑内川」では、ここに広く世間に名が知れた料理屋があり、四季を通じて賑わっていることが述べられている。この例のような、その場所の賑わいに着目している場合に、この分類へ該当させた。

次に、何らかのその場所における「名物」を取り上げて評価している場合である。例示した「南品川鮫洲大森」においては、この地で産する海苔が、諸国の中で最も勝れた名産であることが記されている。名物や名産を特記している場合、この分類とした。

次にその場所の「風流」さに着目している場合であり、「水神の森 真崎の社」では、この辺りの風景には風流な趣きがあり、それは詩歌を詠ずる人達が常に賞賛している、と述べられている。このように、風流であるさま、また風流を解する「騷客」や「騷人」が訪れる場所としてその地を取り上げている場合、この分類とした。

つづいて、ある場所の「靈驗」の著しさ

や、そのあらたかな靈応を求めて人々が群集をするさまに着目している場合である。「堀之内妙法寺」では、この寺の靈驗を得ることを目的に、四季を通じて参詣者が多いことが記されている。このように、ある場所の靈驗やその利益を求めての群参に着目している場合がこの分類となる。

次に、「耕地や広野」の見事さに着目している場合である。例として挙げた「関口上水端芭蕉庵椿山」では、この地はこれというべきほどの風景ではないけれども、水辺や広野に接しその眺めがひたすら雅やかな趣のある所である、と評されている。このような、特に耕地や広野を取り上げて称えている場合をこの分類とする。

最後に、「季節や天候、時刻」の表現が見られ、特筆されている場合である⁴⁹⁾。例として「根津権現社地 紅楓」では秋から初冬にかけての紅葉を、「赤羽根水天宮」では、四季を通して評価がされているが、特に雪の日の際しての眺めを素晴らしいと賞美している。また「金竜山観音堂 その二 弁天山」では、この堂の開閉をつげる鐘の存在が記されている。

以上のような風景評価の着目点に基づき、『土産』および『図会』の文章を分析し、含まれる各着目点の数を示したのが表6である。表6から、『図会』と『土産』では、風景を記述する際の観点に、かなりの差異が存在することがわかる。まず、『図会』よりも『土産』の方が、その場所の由緒や位置以外の記述総数そのものが多いということがわかる。その上で、『土産』により多く認められる風景の着目点として、「眺望の良さ」や、その場所における「特徴的な事物」、ある「季節・天候・時刻」における風景の姿が挙げられる。

また、『図会』にはほとんど認められない着目点に、耕地や広々とした広野を愛でることがある。『図会』の中でも一ヵ所、眼下に

表6 『土産』と『図会』における風景評価の着目点数

着目点	『土産』	『図会』
眺望	35	15
景色	25	20
特徴的な事物	23	7
山水美	7	5
遊観	13	6
繁昌	30	23
名物	11	14
風流	17	4
靈験	13	6
耕地・広野	8	1
季節・天候・時刻	53	35
合計	235	136

田園を見渡したその眺めが素晴らしい、という表現が見受けられる。それは『土産』「日暮里諏訪の臺」に対応する『図会』「浄居山青雲禅寺」における説明である。その文章を示すと、「眺望れば荒川の流れば白布を引くがごとく筑波黒髪山の山々は画くに似たり豊島の村落は眼下にありて耕し畑うつ賤が業までも一望に入り……（中略）……この地の風色画中にあるが如し」である。これは諏訪の台という高台から見下ろした際、その遠望という行為の結果、眼前にもたらされる田園を愛でているといえる。それに対して『土産』で8カ所見出せる、耕地や広野に対する賞美のうち、7カ所は、高台から見下ろした時に眼下に広がる風景としての田畑、広野という視点ではなく、耕地や広野そのものの魅力を記述したものである。たとえば『土産』「逆井の渡」では、「耕地の在さま菜園の体風流好士の遊観なり」と、耕地と野菜畑のありさまが風流を解する人々にとっては遊観に値する所である、と述べられている。また同じく『土産』「小梅の堤」では、「させる勝地にあらざといへども掘割の水の流れハ一条の帯のごとく農人広野に耕すさま筆にもをさをさ及びなき風流閑静の土地なれば世を避るの人のこ

こに住して老を養なふの便とす」というように、農夫が広野を耕す様それ自体が風流である、としている。このような風景への視座は『図会』には認められないものであり、『土産』の風景評価の特徴と言える。

(2) 『絵本江戸土産』に描かれた場所の風景評価の着目点

『土産』で取り上げられた場所の分布を示したものが図6、各場所の風景評価の着目点を記号で表記し、その分布を示したものが図7である。

図6の全体からは、特に河川沿いや、日本橋といった商業地、上野や浅草、吉原、王子、品川といった遊興地に、描写地点が多く分布するということがわかる。これらの場所の風景評価がどのようになされているのかについて、着目点ごとに順を追って見ていきたい。

i) 眺望

眺望の良さを愛でている場合、眺望する場所に関していくつかの特徴が見られる。まず、図6の網掛で示した台地上、すなわち高所から四方を見渡す事例である。この例には18「国府の臺眺望」が挙げられ、そこでの説明は「利根川に臨む赤壁にて四方万里を一目に見する」となっている。95、96の「飛鳥山花見」もこの場合に含まれる。

これらの例ほどの高所ではなく、より江戸の中心部に近い場所の坂や岡の上から遠望する事例も挙げられる。例えば63「江戸見坂」、その説明として「江都第一の岳にしてここへ登れば江戸中一眼に見する」や、64「愛宕権現」、説明として「山上の眺望たぐひなし」、113（湯島天神）「同所坂上眺望」、説明として「遠見すれば東叡山の堂社手に取如く不忍弁天池中の風光掌に在が如し東門跡浅草寺また隅田川兩岸の樹立等その眺妙尽る時なし」がある。他に112、115、159がこの場合

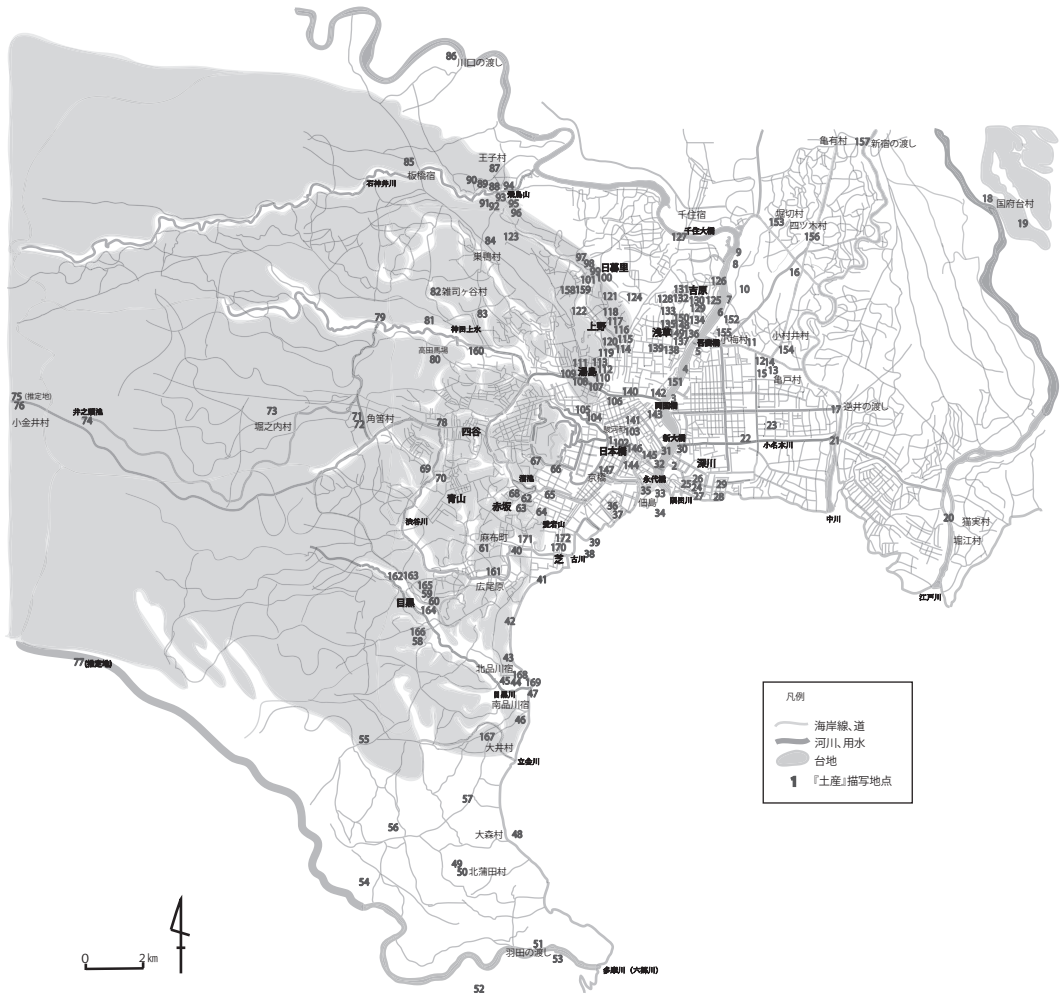


図6 『絵本江戸土産』に描かれた場所

- 注1) 明治13年～17年測図第一軍管地方二万分一迅速測図をベースマップとして作成。
 2) 河川・上水・橋・渡し・池・山・村・町・宿・汎用地域各名称は『日本歴史地名大系』12, 13, 14および『角川日本地名大辞典』12, 13, 14をもとに付記した。
 3) 道・水路は『復元江戸慎報地図』, 「改正御江戸絵図 (1826)」(『地図で読む江戸時代』所収), 「分間御江戸大絵図 (1848)」(同上書所収), (宝永御江戸絵図 (1853)) (同上書所収), 「繁栄御江戸絵図 (1867)」(同上書所収)を参照した。
 4) 図の番号は描写地点で, 番号は表2に対応する。描写地点は『土産』の絵と, 上記注1)～3)の資料をもとに筆者が特定。75および77は推定地。

に含まれる。

また, 高所から眺望する対象がより限定されている場合もある。富士を望む例として, 60「富士見茶屋」が挙げられる。その説明は「此辺四方うちひらき遙かに西を臨めバ富士の高根鮮明に見わたして絶景いはんかたな

し」となっている。

次に, 高所ではない場所から眺望する例を, 遠望する対象ごとに見てみたい。まず広々とした海とその先の景色を見渡す場合である。この例として38「芝浦」が挙げられ, 説明文は「この所より見わたせば海水渺々と

して安房上総を望ミ右に羽田の森幽にて遠く見ゆる白帆のさま常に月雪にます絶景なり」となっている。この他に41, 43, 45, 48, 167, 169がこの場合に含まれる。

川を遠く見渡す場合もある。4「御廐河岸駒形堂 金竜山遠望」がこの場合である。ここでは「わたし場川中にいたれば遥に見ゆる筑波の嶺隅田川の屈曲せる岸に真白き駒形堂梢を貫く五重の塔ハこれ金龍山浅草寺実になき光景なり」という説明がなされている。

他に、橋を望む場合 (1)、松の群立つ様を見やる場合 (20, 67)、山々や堤堰を遠望する場合 (67)、富士を望む場合 (103)、土倉の連なりを見やる場合 (146)、花菖蒲を見渡す場合 (153)、付近の絶景を見渡す場合 (57)がある。そして広野を見渡す場合に関して、129「日本堤山谷」では、「吉原大門入口の辺より見わたせば芒々たる広野にして遙かに小塚原の地蔵を見る雪の日殊に絶景なり」と広野を望み愛でる文が認められる。また、「眺望がある」という表現 (40, 98) も見られ、例えば98「日暮里諏訪の臺」では、「四時の眺望あるが中にも春ハ殊さら賑ハひて」と表されている。

ii) 景色

景色の良さが評価された風景に関しては、景色が良いと評する対象により六種類に分類できる。それらを順を追って見ると、一つ目は水辺の風景である。この事例には76, 77, 88, 93, 126が該当する。126「橋場の渡し」とその説明「隅田川の風光ハここにまさる所なし」が例として挙げられる。

二つ目は152「請地秋葉権現境内」において「殊にこの社地景色よく都下の騷客群集す」と表されるような、寺社地の風光の良さである。他に99, 100が挙げられる。

三つ目は76, 116, 120で見られる「花の美しさ」に対する賞美である。例として116「(上野) 其三清水堂花見」, 「彼岸桜の大木数

十株ありて春時の一奇観更に雲の如く雪に似たり」が挙げられる。

四つ目は自然の風景の良さである。161, 162がこれにあたり、162「目黒元富士下道」を例として「この所は自然の風景他に倍りたる勝地」という説明とともに示すことができる。

五つ目は108「御茶の水」とその説明、「兩岸絶壁にして風景よし殊に月雪を称すべし」のような、その場所のみの特性が反映された風景である。たとえば御茶の水は江戸城の外堀という独自の状況があり、上記のような風景が評価されていた。この例には他に125, 154が該当する。

六つ目は特定の何かに対して言及はせず、その場所全体の景色の良さを表現している場合である。6, 30, 31, 59, 96, 143, 149, 150がこれにあたり、例として30「新大橋萬年橋正木の社」の「此辺四方に気色を備へて見所もまた多し」が挙げられる。

iii) 特徴的な事物

図7からは、特徴的な事物は、江戸の辺縁部にはあまり存在していないことが見て取れる。その上で何が「特徴的なもの」として挙げられているかに注目すると、おおよそ四つの種類に分けられる。

一つ目は5, 15, 32, 107, 166に見られるような「橋」である。これについては表5に5「宮戸川 吾妻橋」の説明文を例示した通りである。

二つ目は、例えば116「(上野) 其三清水堂花見」の「舞台高欄悉く朱塗にして荘厳美を尽せり」に見られるような、寺社における建造物である。これには他に27, 115, 117, 118が該当する。

三つ目は松や桜、草花など、取り立てて目を引く植物である。9, 22, 121, 123, 130, 151がこれにあたる。22「小奈木川五本松」では、対象の松が「実に稀代の名木なり」と

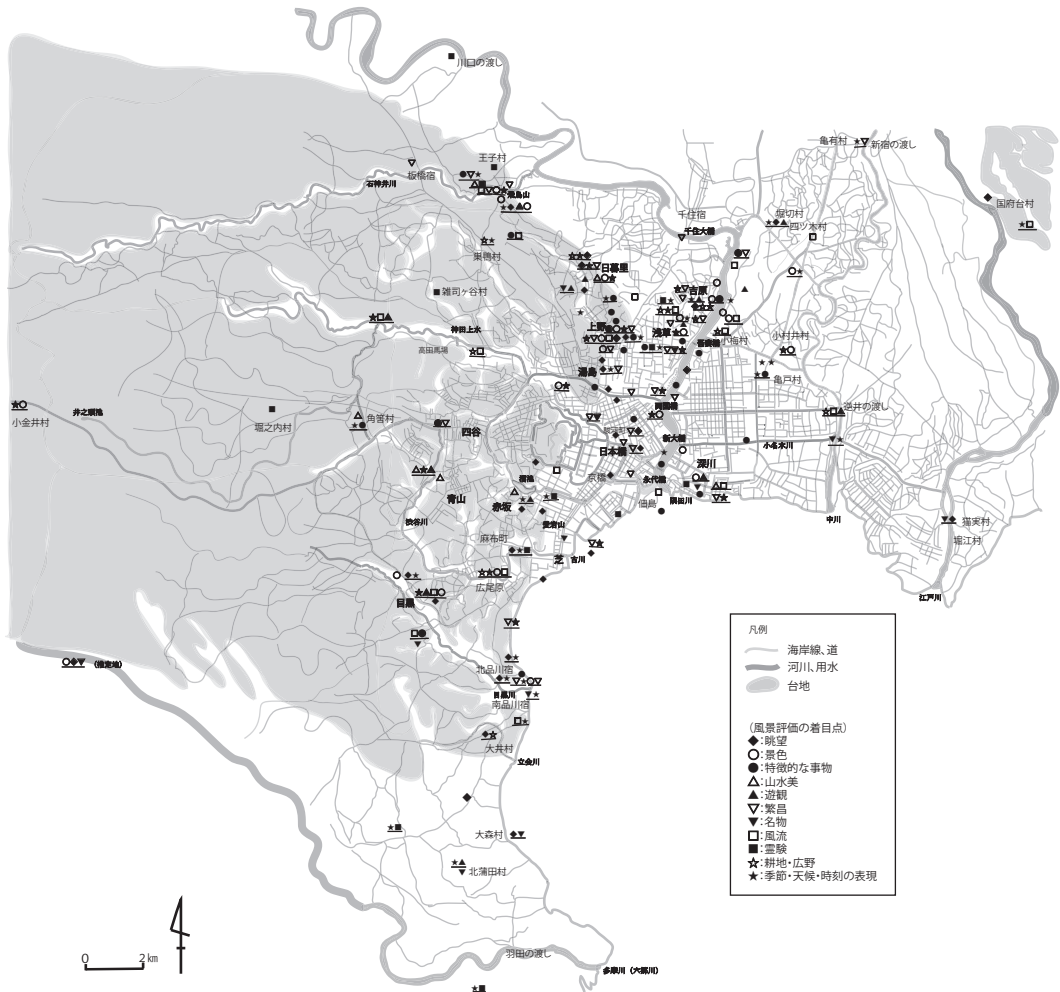


図7 『絵本江戸土産』に描かれた場所の風景評価の着目点

注) 一つの地点に複数の評価が認められる場合、全てその地点への評価であることを記号に下線を付すことで示した。ベースマップ等については図6に同じ。

称されている。

四つ目は、上述三者以外の場合である。「この宿美麗なる旅店」と表されるような、甲州街道の宿駅である78「四ツ谷大木戸内藤新宿」における旅店や、馬術の稽古をする馬場(141)、金龍山開閉の規とする鐘(136)、その地の案内として滝の図が表されるほど数多くある滝(90)、今戸の竈(125)、金龍山浅草寺の雷門(137)、その他には34, 72, 139もこれにあたる。

iv) 山水美

その場所に山水の美がある、として評価される事例には、三つの系統が存在する。一つ目が69, 70, 71, 88, 99, 100に相当する、寺社の敷地内に庭園として作られた山水の美しさである。二つ目は、木場(29)の様子に山水美を捉える視点であり、三つ目が、表5に示したように溜池と山王社そして周辺に植えられた桐(68)に山水美が存在すると主張する場合である。

v) 遊観

遊観に値する場であるという評価に関しては、以下のような分け方が可能である。すなわち、寺院の庭園を見て回る場合 (69)、梅園や花園を見物する場合 (10, 49, 158)、咲き乱れる花を見て回る場合 (153)、春に花見を楽しみながら巡る場合 (95, 96)、夏に螢を見て回る場合 (62)、高所からの眺めを楽しみながら巡る場合 (59)、耕地の有り様や菜園の様子を見て回る場合 (17)、である。このうち17「逆井の渡し」は前節で指摘したように、耕地や菜園そのものを愛でているため、これらが遊観すべき対象として認識されているということも読み取れる。さらに上記の対象は歳時と関係しており、季節ごとに名所を遊観して楽しむという文化的状況も垣間見える。

vi) 繁昌

繁昌（賑わい）の風景がある所を整理すると、九つの系統に分類できる。一つ目は興行場の集まっている場所であり、3, 28, 42, 169が該当する。3「両国橋」の例を挙げれば、その説明文は「東都第一の繁華にして観場芝居辻講釈や八納涼花火の景昼夜の遊興絶間なし」となる。

二つ目は、料理屋で賑う所である。ここには9, 85, 93, 119, 120, 138, 142, 157が含まれる。たとえば157「新宿の渡し」には「名高き料理や等いと賑ハシ」と記されている。

三つ目は宿場の賑わいである。例として127「千住大橋」では「奥羽及び常陸下野ミなこの所より行によりて宿の賑ひ品川に次ぐ」とあり、他に78, 85が該当する。

四つ目は梅や桜の鑑賞で賑わう場所である。44「御殿山の花盛」の「盛の頃の賑ひハ他に比ぶるかたもなし」が例として挙げられる。他に14, 98, 135が該当する。

五つ目は寺社境内の繁華な場所である。

135「金龍山観音堂 奥山」において独楽回しの芸が名高く「浅草観音奥山の光景江都第一の賑ひ也」と説明されるような所であり、他に112がある。

六つ目は船の出入りにより賑わう場所である。37, 140, 144がこれにあたり、39「(芝浦) 其二」の「夏の末より秋にいたり釣する小舟日毎に絶ず諸国の入船出船実には繁昌を顕ハせり」が例に挙げられる。

七つ目は人々の生活や経済活動の中心地における賑わいである。102「日本橋」、103「駿河町」、104「鎌倉河岸」がこれに該当し、「日本橋」では「橋の南北群集夥し誠に江都第一の繁華也」と記されている。

八つ目は享楽場所の賑わいである。131, 132の吉原、134の猿若町がこれにあたる。134「猿若町」では、「早春より年の尾に至り六換の興行人の山をなし櫓太鼓の音絶ずはんじやう以前に十倍せり」とある。

九つ目は、涼を求めて賑わう場所である。88「王子滝の川」においては「水辺なるにより春夏尤賑ハへり」と記されている。

vii) 名物

名物として挙げられたものは、魚介類およびその他の食べ物が挙げられる。魚介類を名物とする場所は20, 21, 47, 48, 77で、それぞれ鯉、魚、貝、海苔、鮎の記述がある。その他の食べ物の記述は58, 104, 138, 172にあり、栗餅飴餅花、白酒、目川菜めし田楽、醴が挙げられている。

viii) 風流

風流であることが愛でられている場所は、どのような点で風流と評されているのかにより、以下の種類に分けられる。すなわち、社地の景色の良さ (152)、紅葉の名高さ (19, 46)、騷人が度々訪れる場所であること (8, 33, 59)、161で「四時草木の花更に人力を借らずといへども自然咲きつづき」と述べられ

ているように、自然のままの状態が見られること (124, 161), 特定の季節の趣があること (79, 120), そして、耕地や郊原, 広野に望むこと (17, 133, 155, 156, 160, 166) である。このうち最後の点は、下記の x) と関わりを持つ。

ix) 霊験

霊応が著しい、またその霊験を求めて人々が群参する事例は、大別すると三種に分けられる。一つ目は、表5に例示した73「堀之内妙法寺」や82「雑司ヶ谷鬼子母神法明寺」[「乳なき婦人ここに祈りてことごとく霊応あり」]のように、その場所における霊応の著しさを直接的な言葉により表している場合 (他に、65, 86, 87, 89) である。

二つ目は、37 (築地御坊)「其二」[「當御堂ハ東都におひて真宗第一の御堂なり」]や、139「浅草御門跡」[「當御堂の大なること八世の人の知る処東都第一の大御堂なり」]のように、江戸で最も秀でた神仏に関する建造物を有していたり、地域の総鎮守であって人々が集まる場合 (他に、25) である。

三つ目は、52「大師河原平間寺」[「三月廿一日を御影供として群参夥し」]や、128「浅草西の町」[「十一月酉の日にハ参詣の諸人群集なし熊手と唐の芋をひさぐ」]のように、一年の内である決まった日時に行われる法会や行事に合わせて人々が集う場合 (他に、40, 56) である。「霊験」の分布を見ると、深川の25「富ヶ岡八幡宮」以外は全て隅田川以西に存在する。この点に関しては、今後改めて検討する必要がある。

x) 耕地・広野

ここではviii) 風流との関連が見て取れる。すなわち、耕地や広野を愛でている場合 (17, 84, 85, 97, 129, 133, 155, 160, 161) のうち、84, 85, 97, 129以外の5ヵ所では、風流であるということが同時に記され

ている。たとえば、前節で指摘した17「逆井の渡」の例に加えて、160「関口上水端芭蕉菴椿山」では、「させる風景の地ならずといへども水に望ミ曠野に望ミテ只管閑雅の地なる」と記されている。そのことは、広野がしとやかで雅やかである、すなわち俗でなく風流である、と評されていることに他ならない。また、84, 133, 155, 161では、いずれも「広野」、「郊野」、「耕地」が「月雪」または「雪」という言葉とともに用いられている。たとえば、上述で示した129の例に加えて97「道灌山」では、「元来広々たる郊野にて月雪の眺望ハさら也」と述べられている。ここから、広野における月雪の眺めは素晴らしいと評されていることが分かる。

xi) 季節・天候・時刻

四季の中で最も数の多い春に関して例を挙げると、7「隅田堤 花盛」では、「弥生の中空には雲か雪かと咲きつづく実には仙境のさまにも勝れり」と、桜の花が雲や雪と見紛うほど見事に咲き誇っているさまを称えている。また47「品川沖汐干狩」では「毎年三月朔日より三日の間を第一として美女も裳裾をひるがへし貝を拾ふを戯れとす」と、潮干狩りに興ずる様子が表されている。春の表現があるものは他に7, 14, 44, 76, 116など20項目がある。

夏の例としては、72 (角筈熊野十二社権現)「其二 大滝」が挙げられる。十二社権現の池から落ちる滝を指して、「小滝をまうけて夏月納涼の一助とす」とし、人々がここに集まって炎暑を避ける様が記されている。夏の表現は他に39, 62, 88, 138, 142, 153など10項目に見られる。

秋は、「名高き楓の染るころハ二月の花にも倍たり」(46) と紅葉を愛でながら秋を表現するものがあり、また「中秋の月この所の眺めを最第一とす」(43) と、「月」とともに記される場合もある。他にも、12, 19, 43,

46, 122, など12項目に秋の表現が認められる。

冬は「十一月酉の日にハ参詣の諸人群集なし熊手と唐の芋をひさぐ」(128)と浅草の西の市の様子を伝えているものが挙げられる。冬の記述は他に31, 84, 97, 120, 129など15項目がある。

天候を表すものの例としては、たとえば上野の不忍池に対して「就雪中の景実に風流の勝地なり」(120)と、その雪の景色を愛でているものなどが挙げられる。天候を示す表現は他に、59, 98, 112, 115など10項目がある。

時刻に関しては、高輪で「毎年七月廿六夜」に行われた月待の賑わいを「楼上の酒宴歌舞音曲嘶し写し画辻講釈その賑ひいふばかりなし」(42)と伝えるものなどが例として挙げられる。他にも97, 108, 138, 161など9項目に、描かれた風景の時間帯を推し量りうる表現が見られる。このように、季節や天候、時刻を表す記述は、『土産』において他の着目点以上によく見られるものである。

以上のような検討から、広重によるその描写地の風景評価の一端が明らかになったと考えられる。

V. おわりに

本稿では、歌川広重の作品『絵本江戸土産』に見られる描写の特徴を、同時代の名所案内記『江戸名所図会』との比較から明らかにすることを試みた。その結果明らかとなったことは以下の通りである。

『土産』の絵とそれに対応する『図会』の挿絵を比較した結果、『図会』では神社・仏閣の全体を俯瞰するものや、雲や霞を配し対象物間をつなぐ描写が多く見られたのに対し、『土産』では神社・仏閣の一部をクローズ・アップした描写や、雲や霞のない描写が多く見られた。これらのことから、『土産』における風景は、『図会』に比べてより現実

的な、実際にその風景を目にした時の様子に近い描かれ方をしているということが明らかとなった。

由緒や位置記述以外の風景に関する記述を対象として、『土産』とそれに対応する場所を記した『図会』の文章を比較した結果、風景を評価する着目点として見出せたのは以下である。眺望の良さ、眺望以外の景色の良さ、特徴的な事物の存在、山水美、遊観に値する点、繁昌している点、名物の存在、風流である点、靈験を求める人々が群参する点、そして耕地や広野の見事さ、ある季節や天候、時刻への着目である。このうち耕地や広野の見事さへの賞賛は『土産』のみにみられた。

以上のように、歌川広重の風景描写と評価の特徴の一端を明らかにした。ここで指摘したことは、作者である歌川広重の風景に対する捉え方を反映したものと考えられる。しかし、千田の「風景の価値づけは、きわめて主観的であるということは、いうまでもない。その点において、時代性をももつ」とする考察⁵⁰⁾、また中村による「特定の社会集団あるいは特定の文化圏内で暮らしている人びとのあいだには、ある種の風景的イメージが共有されているのがふつうである」⁵¹⁾という論考をふまえると、広重の風景に対する捉え方や感覚は、彼が生きた時代と、江戸という場所の中で生成されたものであり、それが少なからず当時を生きた人々の間で共有されていた可能性を指摘できる。社会におけるメディアの一翼を担うものとして浮世絵や絵本が存在した⁵²⁾時代に、名を得た浮世絵師によって生み出された作品の果たす役割は大きかったと考えられる。歌川広重という人物が、ある風景観を抱きながら絵本や浮世絵という形で風景を描き出した。それらの作品とそこに描き出された風景は、彼が生きた時代性、場所性を内包するものであり、それらの作品が流布することで、同じ時代と場所に生きた人々

は、描き出された江戸の風景の見方を再確認したとも考えられよう。

(京都大学大学院人間・環境学研究科・院生)

〔付記〕

本稿は2011年歴史地理学会にて口頭発表したものに修正を加えたものである。本稿作成に当たり、京都大学大学院人間・環境学研究科小方登先生はじめ、金坂清則先生、小島泰雄先生、同研究室院生の皆さまにはゼミ等でご指導いただき、多くのご助言をいただきました。記して深く感謝申し上げます。また修了・卒業後も折に触れてご助言くださいます、京都大学名誉教授山田誠先生(現龍谷大学)、専修大学上原秀明先生に深く御礼申し上げます。そして本稿の閲読をしてくださいました先生方に、厚く御礼申し上げます。

〔注〕

- 1) 本稿では風景という語を、千田による「風景の価値づけは、きわめて主観的であることは、いうまでもない。その点において時代性をも持つ」(①千田稔『風景の文化誌』古今書院、1998、16頁)、矢守による「『風景』は景観一般ではなく、O・F・ボルノウのいう自己のパースペクティブで捉えた空間、私が眺め、その中で生きている環境の眺め」(②矢守一彦『古地図と風景』筑摩書房、1984、7頁)と同義で用いるものとする。
- 2) 千葉は『江戸名所図会』における挿絵の図像から、描かれている都市内部の諸相を明示し、またその構成に製作者の意図を見出している。さらに挿絵に見られる屋根の表現から江戸の都市景観ひいては都市域に関わる分析・考察をしている。①千葉正樹『江戸名所図会の世界』吉川弘文館、2001。鈴木は時期別の江戸名所について整理した上で、『江戸名所図会』の編纂目的に言及し、また他の名所案内記に見られる作者の江戸認識について論じている。②鈴木章生『江戸の名所と都市文化』吉川弘文館、2001。
- 3) 金子は江戸住民の、寺社参詣、花見等の行動文化に着目し、それが繰り返られる場所の分布、地域的特徴を『江戸名所図会』により検討して、行動文化の解明を試みた。金子晃の「近世後期における江戸行楽地の地域的特色—『江戸名所図会』からみた行動文化—」歴史地理学175、1995、1-21頁。
- 4) 山近は「京都もの」に関わる名所案内記について、内容上の特性と記述スタイルという二点を基軸に整理をした。山近博義「近世名所案内記類の特性に関する覚書—『京都もの』を中心に—」地理学報34、1999、95-106頁。菅井は京都における江戸時代の名所案内記を六つのタイプに類型化した。菅井聡子「江戸時代京都の名所案内記と遊歩空間—類型化と編纂史の分析を通して—」地域と環境2、1999、29-39頁。
- 5) 林屋は近世初期の名所記における要素には「遊樂的」、「啓蒙的」なもの、「実用的」、「事彙的」なもの二種があるとした。①林屋辰三郎『中世文化の基調』東京大学出版会、1953、322-341頁。水江は近世の名所は知識と教養だけのものではなく、実際にそこへ行き見るべき対象となったことを論じた。②水江漣子「初期江戸の案内記」『江戸町人の研究』第3巻、1973、29-108頁。上杉は大坂の初期名所案内記にみえる名所観を検討し、〈過去名所〉と〈現在名所〉の区分を提示した上で、江戸や京都とは異なる大坂の名所観のあり方を明らかにした。③上杉和央「17世紀名所案内記にみえる大阪の名所観」地理学評論77-9、2004、589-608頁。長谷川は黒川道祐による『雍州府志』の成立が、中世以来の名所観から脱却し新たな名所観が形成されつつあった時代の流れに沿って、近世的な庶民が享受しうる名所観の形成を促したことを示した。④長谷川奨悟「『雍州府志』にみる黒川道祐の古跡観」歴史地理学51-3、2009、25-43頁。
- 6) 矢守は名所案内記や地誌類が機能分化し、地誌的記述が道順方式でなされることを指摘している。また名所図会に俯瞰図ないし鳥瞰図が多い理由は、その構図が複数の名所や寺社の相対的位置、すなわち地誌的配

- 列を示すことに適していたからである、と論じている。前掲1) ②78-79頁。長谷川は『都名所図会』に描写されている空間表現から、その表象の意味を考察した。長谷川奨悟『『都名所図会』にみる18世紀京都の名所空間とその表象』人文地理 62-4, 2010, 60-77頁。
- 7) この他にも、名所図会の作者について論じた次の研究などがある。千田稔「秋里籬島と籬島秋里—名所図会の作者は作庭師か—」奈良女子大学地理学研究報告Ⅱ, 1986, 99-113頁。
- 8) 葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー』地人書房, 1988, 11-47頁。
- 9) 小林 忠『浮世絵の歴史』美術出版社, 1998, 124頁。
- 10) 小林 忠・大久保純一『浮世絵鑑賞の基礎知識』至文堂, 2000, 225-252頁。
- 11) 浮世絵は「浮世」の絵である。見立絵、やつし絵とは、描かれる対象は「浮世」の人物や事物であるが、その構成は古典になぞらえ、基とする古典に関わる要素が盛り込まれた作品である。たとえば鈴木春信の「座舗八景」は「瀟湘八景」になぞらえたもので、その中の「琴路落雁」における琴柱の列が、落雁の連想を意図して描かれている。このように見立絵ややつし絵では、見立てられた古典とともに解釈することが求められる。小林忠『江戸の浮世絵』藝華書院, 2009, 154-156頁。
- 12) 前掲9) 5頁。
- 13) 前掲9) 6頁。
- 14) 前掲1) ②56頁。
- 15) 前掲1) ②76頁。
- 16) 前掲9), 前掲10)。
- 17) たとえば, 前掲11)。
- 18) 岸 文和『江戸の遠近法』勁草書房, 1994。
- 19) たとえば①小島烏水『浮世絵と風景画』前川文栄閣, 1914, ②内田実『広重』岩波書店, 1930, ③鈴木重三『広重』日本経済新聞社, 1970。
- 20) たとえば楯崎宗重『日本の美術104広重』至文堂, 1975, 25頁。
- 21) 大久保純一『広重と浮世絵風景画』東京大学出版会, 2007。
- 22) 他に、「百景」が安政の大地震からの復興を描写しているとする、①原信田実『謎解き広重「江戸百」』集英社, 2007や、「百景」を、名所絵、四季絵の伝統を内包しつつ、安政の大地震からの復興を報道する作品として、その構図や刊行順、価格、目録等についての効果を指摘し、さらに「百景」が有する水描写の意味を江戸という都市の成立ちやそこにおける人々の暮らし等から解いている、②藤澤 紫『『名所江戸百景』の背景と意味』(浅野秀剛『広重名所江戸百景—秘蔵岩崎コレクション』小学館, 2007), 194-207頁がある。
- 23) 1853(嘉永6)年に出版された『當代全盛江戸高名細見』(東京都立中央図書館所蔵本)には、吉原細見に模した形で当時の人気絵師が番付されているが、その中で「豊國 にかほ」, 「國芳 むしや」と並んで「廣重 めいしよ」とあり、当時広重が名所絵の代表として掲げられていたことが分かる。
- 24) ヘンリー・スミス『広重 名所江戸百景』岩波書店, 1992, 12頁。前掲19) ③80頁。
- 25) 浅野秀剛『『名所江戸百景』—岩崎本を中心に』(『広重名所江戸百景—秘蔵岩崎コレクション』小学館, 2007), 178-193頁。
- 26) 阿部美香「浮世絵「名所江戸百景」に描かれた風景について—江戸の人々にとっての「名所」に関する—考察—」地域と環境8・9, 2009, 320-334頁。
- 27) 前掲11) 449頁。前掲19) ②189-201頁。前掲19) ③25-45頁。
- 28) 前掲19) ③79頁。また成瀬はこの表現を「近像型」と名付けている。成瀬不二雄『日本絵画の風景表現：原始から幕末まで』中央公論美術出版, 1988, 322頁。
- 29) 『土産』は京都大学総合人間学部、人間・環境学研究科図書館所蔵本を用いた。頁数は初編が25頁、二編が27頁、三編が26頁、四編が25頁、五編が24頁、六編が25頁、七編が25頁である。『土産』巻頭の序文は初編を金水陣人が担当し、二編を松亭漁父が、三編を金水道人が、四編を一立斎広重が、五

- 編を金水陣人が、六編を松園主人梅彦が、七編を金水道人が担当している。
- 30) 『江戸名所図会』は京都大学附属図書館所蔵本を用いた。
- 31) 前掲2) ②27-128頁。
- 32) 序言の次、または奥付の前の半頁に描出された風景のうち一覧に加えたものは、番号24, 50, 101, 148, 172である。一覧へ挙げなかったものは、たとえば初編奥付の前頁に、亀の絵と「亀栄万歳池」という言葉のみが記されているような、吉祥を絵と一言により表したものや、五編序言の次頁に、鯛とエビの絵および「春風や往来賑はふ魚市場 煙浦」と記されるもののように、歌人や俳人による和歌、俳句とある事物のみが描出されているようなものである。
- 33) 130は「新吉原町」の挿絵に「見かへり柳」「衣もん坂」という文字が、143は「兩國橋」の挿絵に「元柳はし」という文字、151は「御厩河岸渡」の挿絵に「椎木やしき」、156は「渋江 西光寺清重稲荷」の挿絵に「用水渡引舟」の文字が記され、それぞれの様相が、主題となる対象の周辺状況をなす一部として描かれている。また17「逆井の渡」は「真光山善通寺」の説明において、「逆井渡口より八九町東の方、東小松川村にあり」とその位置を示す文内にも記載が見られる。
- 34) 前掲18) 89頁-209頁。小林忠監修『浮世絵師列伝』平凡社、2006、60-61頁、99頁、130-139頁。
- 35) 前掲10) 247頁、および辻惟雄『日本美術の歴史』東京大学出版会、2005、269-272頁、前掲28) 151頁。雪旦に関しては、武田二郎「長谷川雪旦再考」国文学解釈と鑑賞951-8、2010、98-106頁。
- 36) 樋口忠彦『日本の景観』春秋社、1981、43、50頁。
- 37) 前掲1) ②78-79頁。
- 38) 前掲1) ②80頁。
- 39) 面出和子・斎藤綾・佐藤紀子・穂田夕子『遠近法と絵画』美術出版社、2003、11・29頁。
- 40) 千葉は雲の表現について、武家世界をばやし町人世界を強調するという意味を見出しているが(前掲2) 61頁)、本稿では伝統的な日本画における表現技法という点のみから分類する。
- 41) 前掲8) 11-47頁。
- 42) 前掲1) ①86頁。
- 43) 前掲39) 11・29頁。前掲28) 32-180頁。
- 44) 名所図会の文章を検討したものには次のようなものがある。山近は、『都名所図会』の文章が、伝統的な名所観を受け継いだ記述が多数を占める一方で、現実の施設や事象の状態に関する描写も見られると指摘している(山近博義『『都名所図会』の構成と本文にみられる諸特徴』地理学報36、2005、19-34頁)。板坂は、名所図会の風景描写を紀行文のそれと対比させながら論じ、前者が読みやすい常套的な美文と、具体的な観察に基づく実用的表現の両方を備えていると述べている(板坂耀子「名所図会の風景表現」語文研究38、1975、16-26頁)。
- 45) 前掲5) ④27-34頁。
- 46) 「眺望」に関しては、アプルトンが、人間は生物として生息するに有利な環境を「眺望と隠れ場」の観点から潜在的に評価すると論及し(ジェイ・アプルトン・菅野弘久訳『風景の経験』法政大学出版局、2005、95-107頁)、樋口が「眺望のある景観」(前掲36) 258-260頁)と、中村が「眺望の値うち」(中村良夫『風景学・実践篇』中央公論新社、2001、66-68頁)と言及し、風景の見方の一つとして取り上げている。
- 47) 「眺望の良さ」に分類する際の基準として用いた言葉は以下の通りである。「眺望」「遠望」「瞻望」「見渡す」「望む」「眺める」「見はらし」「渺々」「茫々」また、空や原、海や川といった連続的な風景を見渡している場合もこれに含めた。なお、これらの言葉が同時代にどのような感覚で用いられていたのか、例を示すと以下ようになる。「やや足をとどて直立し、四顧して手を額にし、遠望の状を為す」(寺門静軒・日野龍夫校注『江戸繁昌記』岩波書店、1989、262-263頁)。
- 48) 景色の良さで分類する基準として用いた言

葉は以下の通りである。「風景」, 「風光」, 「風色」, 「景色」, 「光景」, 「景」, 「壯観」, 「奇観」, 「美観」, 「観」, 「絶景」, 「勝景」, 「勝地」, 「名所」, 「名勝」, 「佳景」, 「佳境」, 「美景」, 「気色」, 「勝概」, 「景地」, 「清観」, 「眺妙」。これらの言葉の選択に当っては、小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典』小学館、2006を参考にした。なお、以上の言葉に関して、同時代にどのような使い方がなされていたのかについて例を示すと以下のようなものである。「芙蓉の峰、愛鷹に連なりし有様、いつ見てもいつ見ても倦む時あらぬこの風景」「晴れて夕日に三保の浦、松も霞の三重櫓、景色に見惚れたたずめり」(鶴屋南北・坪内逍遙、渥美清太郎編『大南北全集』第15巻、春陽堂、1927、336頁)、「行く春丹波に居まさば、固より此の情浮ぶまじ、風光の人を感動せしむること真なるかな」(落柿舎去来『去来抄』、俳書堂、1916、5頁)、「蛍の光、闇夜の景色、風姿ありといふ」(同、10頁)、「岩を這て仏閣を拝し佳景寂寞としてこころすみ行のみ覚ゆ」(松尾芭蕉・上野洋三、櫻井武次郎編『奥の細道』岩波書店、1997、44頁)、「此所より富士の山正面に見えて、裾野第一の絶景なり」(十返舎一九・塚本哲三編『東海道中膝栗毛』有朋堂書店、1922、128頁)、「ここは東海道の名だたる一勝地にて、殊に賑はしく両側の茶屋、いづれも綺麗に見えたり」(同、304-305頁)、「奈良に

いたりて壯観大なり」(上田秋成・中村幸彦校注『上田秋成集』岩波書店、1968、357頁)、「奈良の造営の美観にもまさりて」(同、358頁)、「山野海浜の美景に造化の功を見」(松尾芭蕉・井本農一他校注『松尾芭蕉集』小学館、1975、324頁)、「高根の景地に、大同年中の建立といひ伝へて」(井原西鶴・麻生磯次、富士昭雄訳注『本朝櫻陰比事 対訳西鶴全集』明治書院、1977、5頁)。

- 49) 1838(天保9)年に刊行された『東都歳事記』(斎藤月岑、幸成編纂、長谷川雪旦、雪堤画。朝倉治彦校注『東都歳事記』全3巻、平凡社、1970)の冒頭には「毎歳江府にあらゆる神社の祭祀仏院の法会、並に貴賤歳時の俗事に至る迄、節序に随て是を輯録し遠邦他境を以てし将郊外といへども江城の良賤歩を運ぶの勝區はともに記して遊覧の一助とす」とある。また1827(文政10)年刊行の『江戸名所花暦』(岡山鳥著編、長谷川雪旦画、京都大学附属図書館蔵本)は四季折々の草花や鳥、寺社の様子が四巻42項目に渡ってまとめられている。このような事例から、当時、季節や時刻、また天候といったものが生活の中で欠くことのできない要素であったことが伺える。
- 50) 前掲1) ①86頁。
- 51) 中村良夫『風景学入門』中央公論社、1994(初版1982)、60頁。
- 52) 前掲9)。鈴木俊幸『絵草紙屋 江戸の浮世絵ショップ』平凡社、2010。